《論　説》

近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅のルートと歩行距離

――旅日記を史料として――

谷釜　尋徳

１．問題の所在

今日と比べて移動手段が未発達な近世社会にあって、人間の陸上交通は主に徒歩で行われた(1)。そのため、遠方の土地まで旅をする時も、旅人は行程の大半を歩いて移動する必要に迫られていた。それでは、長距離を徒歩で移動した旅人は、毎日どのくらいの距離を歩いていたのであろうか。スポーツ史の観点から近世旅行史をみると、旅人の歩行能力の問題が重要な課題として浮かび上がってくる。

そこで本研究では、日本人の幅広い層にまで旅が一般化した近世後期(2)の庶民(3)による伊勢参宮の旅に着目し、彼らの歩行距離の傾向を明らかにする。また、旅人の歩行距離を解明する前提として、彼らの在地出立から帰着までの足取り（＝ルート）についても検討を加えるものである。

従来、近世旅行史の通説では、旅人の歩行距離は１日あたり10里（約39km）程度として捉えられてきた(4)。しかし、この歩行距離の値は史料的な裏付けに乏しく、再度検討する余地が認められる。

こうした観点から、史料に基づいて取り組まれた近世後期の伊勢参宮の旅に関する先行研究を整理しておきたい。江戸及び江戸近郊地の庶民男性の旅日記(5)（14編）を分析した研究によると、彼らの江戸～伊勢間の往路ルートにおける１日あたりの歩行距離は平均で約34.4kmであったという(6)。また、対象

を関東地方一円にまで広げ、庶民男性の61編の旅日記を分析した試みでは、江戸～伊勢間の往路ルートの平均歩行距離は1日あたり約33.1kmであるとの数値が導き出されている[7]。

これらの諸研究が関東地方を対象としてきたのは、実証の裏付けとなる旅日記の残存数が最も多いことと関係しているが、関東に次いで多くの旅日記が残されているのは東北地方[8]である。以前拙稿では、東北地方の庶民男性による伊勢参宮の旅日記（37編）を分析して、彼らの歩行距離（1日平均約34.8km）を明らかにした[9]。しかし、上述の先行研究も含め、いまだ検討の俎上に乗せられていないのが、歩行距離にまつわる男女差の問題である[10]。近世後期に至ると、庶民女性が寺社参詣をはじめ娯楽性を内包する旅に出る道が拓かれていったが、旅の世界に没入した彼女らが男性に勝るとも劣らない健脚の持ち主であったのか否かは全く解明されてこなかった。近世後期の東北地方の庶民女性による旅の記録（＝旅日記）の残存数は、量的に男性のそれには及ばないものの、一定の分量を確認することができる。

そこで本研究では、近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅日記を基本史料として、旅人が在地出立から帰着までに歩いたルートと実際の歩行距離の傾向を、男女の比較を中心に検討するものとしたい。男性と女性の旅の諸相を見比べることで、双方の特徴を浮き彫りにできると考えたためである。

本研究では、蒐集した旅日記の中から通行した地名が詳述されている39編を抽出した。（表1参照）。史料の地域別の内訳は、現在の福島県に該当する地域が11編、以下山形県が11編、宮城県が7編、岩手県が7編、秋田県が3編となる。性別で分けると、男性の旅日記が34編、女性の旅日記が5編である[11]。

2．東北地方の庶民男女による伊勢参宮ルートの類型

歩行距離を解明する前提として、ここでは東北地方の庶民男女による伊勢参宮ルートの類型化を試みる。39編の旅日記の内容から、本研究では東北地方からの伊勢参宮ルートを、近畿周回型、四国延長型、富士登山セット型の3つに類型化した。ルートに関する男女差はみられず、男女ともに概ね上記の3類型

表1　旅日記の基本情報

No.	表題	区分	年代	著者名	在地（現在の地名）	出典
1	伊勢参宮道中記	男	1768	中川清蔵	柏木目村（山形県高畠町）	『高畠町史 中巻』高畠町、1976、pp.652-660
2	西国道中道法並名所泊宿附	男	1773	古市源蔵	宝坂村（福島県矢祭町宝坂）	『矢祭町史研究（２）源蔵・郡蔵日記』矢祭町、1979、252-278
3	参宮道中記	男	1777	今井幸七	高屋村（山形県寒河江市）	『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会、1977、70-114
4	西国道中記	男	1783	白石三次	上大越村（福島県田村市大越）	『大越町史 第二巻資料編Ⅰ』大越町、1998、993-1036
5	伊勢参宮道中記	男	1786	大馬金蔵	泉崎村（福島県いわき市）	『天明六年伊勢参宮道中記』いわき地域学会出版部、1993、５-85
6	伊勢参宮所々名所 並道法道中記	男	1794	阿部庄兵衛	佐沼町（宮城県登米市）	『伊勢参宮所々名所並道法道中記』阿部彰晤、1992、１-155
7	道中記	男	1799	残間庄吉	大谷成田村（宮城県大郷町）	『大郷町史 史料編 二』大郷町、1984、pp.791-808
8	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	男	1805	円学院万宥	中伊佐沢村（山形県長井市）	『長井市史 第二巻（近世編）』長井市、1982、875-891
9	御伊勢参宮道中記	男	1805	森居権左衛門	肝煎村（山形県庄内町）	『立川町史資料 第五号』立川町、1993、
10	伊勢道中記	男	1806	潤秀	長塚村（福島県双葉町）	『近世史資料』双葉町教育委員会、1986、142-159
11	伊勢参宮道中記	男	1811	忠左エ門	生駒矢島藩（秋田県由利本庄市）	『生駒藩史 讃岐出羽』矢島町公民館、1976、432-451
12	道中記	男	1814	安ヶ平某氏	日詰郡山（岩手県紫波町）	『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会、2003、103-129
13	道中日記	女	1817	三井清野	羽州鶴岡（山形県鶴岡市）	『きよのさんと歩く江戸六百里』バジリコ、2006、316-340
14	伊勢参宮西国道中記	男	1818	佐藤幸右衛門	菅谷村（福島県田村市滝根町）	『滝根町古文書調査報告４』滝根町教育委員会、1986、31-64
15	伊勢参宮道中記	男	1818	（著者不明）	柳沢村（山形県西川町）	『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会、1980、45-62
16	伊勢参宮旅日記	男	1823	菊妓楼繁路	石巻（宮城県石巻市）	『石巻の歴史 九巻 資料編３ 近世編』石巻市、1990、524-559
17	伊勢道中記	男	1826	藤四郎	清川口（山形県庄内町）	『立川町史資料 第五号』立川町、1993、３-71
18	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拝宮還録	男	1828	渡辺安治	寒河江（山形県寒河江市）	『寒河江市史編纂叢書 第23集』寒河江市教育委員会、1977、122-170
19	（表題不明）	男	1830	小林吉兵衛	利田村（福島県喜多方市）	『会津高郷村史』高郷村、1981、337-404
20	道中記	男	1830	福士福弥	山田大沢（岩手県山田町）	『お伊勢参り』宮古郷土史研究会、1972、159-184
21	（表題不明）	男	1831	（著者不明）	熊野村（山形県西川町）	『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会、1980、62-83
22	万字覚帳	男	1835	渡辺権十郎	大城村（宮城県多賀城市）	『多賀城市史 第５巻 歴史史料（二）』多賀城市、1985、586-605
23	道中日記	男	1836	黒沢佐助	米沢村（秋田県大仙町）	『中仙町郷土史資料 第三集』中仙町郷土史編さん委員会、1974、266-292
24	伊勢参宮道中日記帳	男	1841	物江安右エ門	大谷村（福島県磐梯町）	『会津高郷村史』高郷村、1981、337-407
25	西国道中記	男	1841	角田藤左衛門	形見村（福島県石川町）	『石川町史 下巻』石川町教育委員会、1968、193-238
26	伊勢参道中の日記	男	1844	（著者不明）	富谷新町（宮城県仙台市）	『伊勢参宮 天保十五年辰年』富谷町古文書を読む会、2008、15-124
27	道中記	男	1849	興助	沢内通大木原（岩手県西和賀町）	『沢内村史資料 第一集』沢内村教育委員会、1986、456-483
28	（表題不明）	男	1849	森右衛門	丸森村（宮城県丸森町）	『伊勢参宮仕候御事』古文書で柴田町史を読む会、2000、２-296
29	（表題不明）	男	1849	（著者不明）	柳沢村（山形県西川町）	『西川町史編集資料 第十一号』西川町教育委員会、1980、83-101
30	伊勢参宮道中記	男	1850	大和屋	南山保城小屋（福島県南会津町）	『日本庶民生活史料集成 20巻』三一書房、1972、497-519
31	道中記	女	1853	米屋和吉	黒沢尻新町（岩手県北上市）	『北上市史 第十二巻 近世10』北上市史刊行会、1986、134-143
32	伊勢道中記	男	1853	幸七	湯本村（宮城県仙台市）	『秋保町史 資料編』秋保町、1975、366-384
33	西遊草	女	1855	斉藤元司	清川村（山形県庄内町清川）	『西遊草』岩波書店、1993、18-534
34	道中日記帳	男	1856	渡辺吉蔵	関本村（福島県南会津町）	『田島町史 第４巻 民俗編』田島町、1977、875-915
35	道中記	男	1857	欠端某氏	福岡村（岩手県北上市）	『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会、2003、167-202
36	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣 道中道法附	男	1859	福田福松	金田一村（岩手県二戸市）	『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会、2003、219-252
37	道中日記	女	1860	坂路河内頭	坂路村（福島県石川町）	『石川町史 下巻』石川町教育委員会、1968、248-258
38	参宮道中諸用記	女	1862	今野於以登	本庄（秋田県由利本荘市）	『本荘市史 史料編Ⅳ』本荘市、1988、610-641
39	道中帳	男	1866	柴田栄太	鳥越村（岩手県一戸町）	『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育委員会、2003、253-302

のいずれかを選択している。

以下では、この3つのルートについて地図を交えて概説していきたい。

①近畿周回型

近畿周回型に該当する旅日記は、史料1、3、10、11、13、15、30、31、39である。この類型の一事例として、『道中帳』（史料39）の旅の全行程を地図上に復元したものが図1である[12]。在地から奥州道中に合流し、途中日光に参詣して江戸へ下る。そこから主に東海道と伊勢参宮道経由で伊勢参宮を果たした後は、熊野、高野山、奈良、大坂、京都などといった近畿の名立たる観光地を周回するため、「近畿周回型」と称した。以降は、中山道を経て善光寺に至

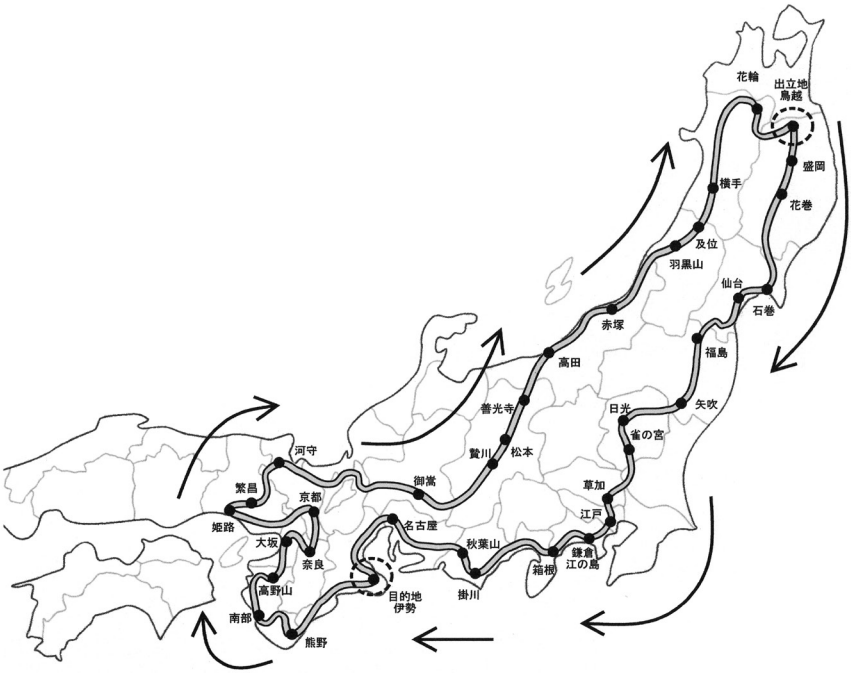

図1　近畿周回型のルートの一例

柴田栄太「道中帳」（1866）『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育員会、2003年、253～302頁、より作成。

り、さらに新潟方面に進んで日本海沿岸を北上して東北に帰着している。

②四国延長型

四国延長型のルートを示す旅日記は多く、史料２、４～９、12、14、16、17、19～25、27～29、32～36、38がこれに該当する。図２は『伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅参詣道中道法附』（史料36）の全行程を地図上に示したものである。

在地出立後、近畿の観光地を周回するまでは上述の近畿周回型とほぼ同様のルートを歩くが、大坂からは船（金毘羅船）で瀬戸内海を移動し四国の丸亀まで足を延ばす。原則として四国を周遊することはなく、金毘羅神社への参詣後

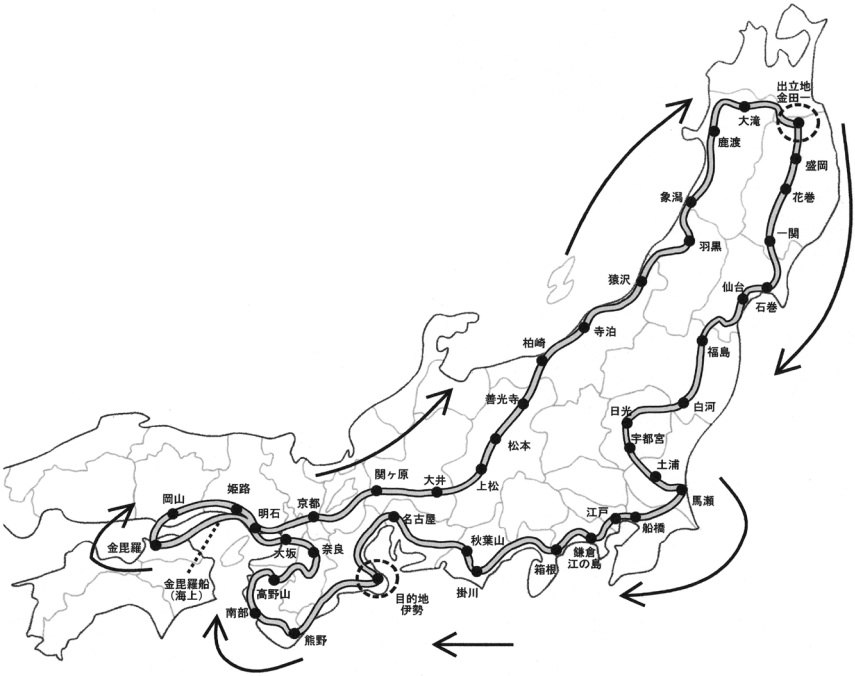

図２　四国延長型のルートの一例

福田福松「伊勢参宮並熊野三社廻り金毘羅参詣道中道法附」（1859）『二戸史料叢書 第六集』二戸市教育員会、2003年、219～252頁、より作成。

は直ちに船で中国地方（岡山）に上陸し、山陽道で京都付近まで戻った後は、再び近畿周回型と概ね重なるルートで日本海側に出て北上して東北へ戻る。

なお、こうしたルートを採ったのは東北地方の庶民だけではなく、関東地方からの伊勢参宮においても、伊勢到着後に中国・四国地方まで足を延ばすケースは広く一般化していた[13]。

③富士登山セット型

全体像としては近畿周回型か四国延長型のルートで旅をするが、江戸から東海道経由で西に向かう途中、主要幹線を一旦外れて富士登山を敢行し、その後再び沼津付近から東海道に合流して伊勢参宮の旅を続ける。このルートに該当

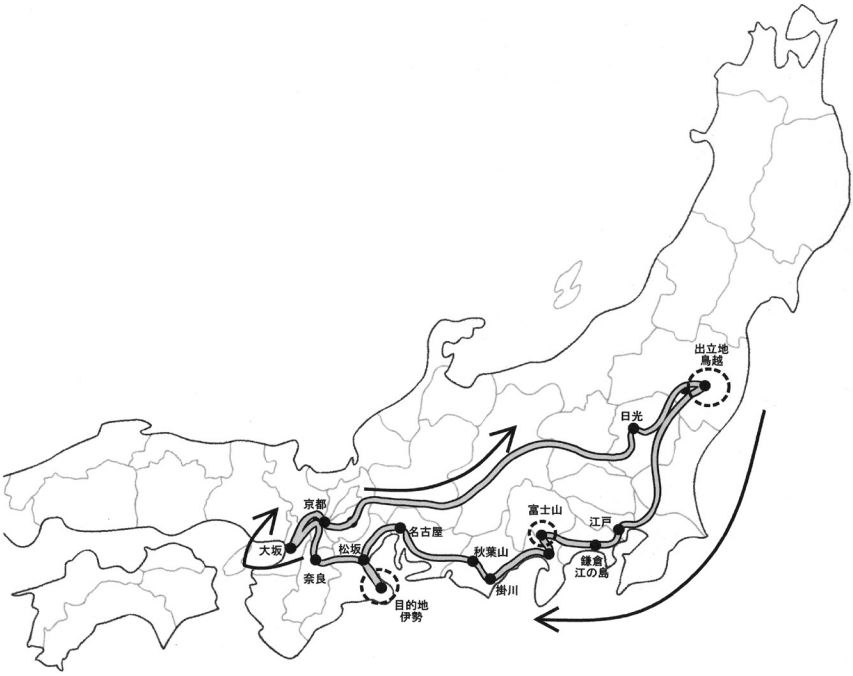

図３　富士登山セット型のルートの一例

坂路河内頭「道中日記」（1860）『石川町史 下巻』石川町教育委員会、1968年、248～258頁、より作成。

するのは史料２、10、20、28、32、37である。一事例として、『道中日記』（史料37）の全行程を図示した（図３参照）。

近世を通して、江戸を中心に関東地方からの富士登山が流行していたことは周知の通りであるが[14]、本研究で蒐集した旅日記の中に富士登山の形跡が散見されることは、この当時の東北地方にも富士信仰が普及していた事実を示して余りある。

以上で確認したいずれの類型も、東北～伊勢間の最短ルートを往復するものではなく、伊勢到着後はさらに西に足を延ばし、往復路で異なるルートを選択していることがわかる。その理由の１つは、居住空間を越境することが稀な近世社会にあって、庶民は滅多にない旅の機会により多くの異文化に触れて見聞を広めようとしたことにあったと推察しておきたい[15]。

３．東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅の歩行距離

ここでは、先に明らかにしたルート上を、東北地方の庶民男女がどのようなペースで歩いたのかを「距離」に着目して考察する。本研究における歩行距離の算出は次の方法によった。

まずは、本研究において取り上げた39編の旅日記の内容から、多くの旅人が実際に歩いた主要な街道を図４に整理した[16]。図中のいずれかの街道を歩いて東北から伊勢まで辿り着き、さらにいずれかの街道を経由して東北まで歩いて帰着したのである。

次いで、各々の街道筋における宿場の配置とその間隔（距離）を明らかにした[17]。その上で、多くの旅日記には、毎日の道中において通過および宿泊した宿場の名称が記されているので、当日出立した宿場から宿泊した宿場までの距離を足していくことで、１日あたりの歩行距離を求めるという方法を採った[18]。

①歩行距離の平均値

表２・表３は、39編の旅日記の分析結果より、在地出立から帰着までの総歩行距離、１日平均の歩行距離、１日に歩いた最長および最短の距離等々を男女

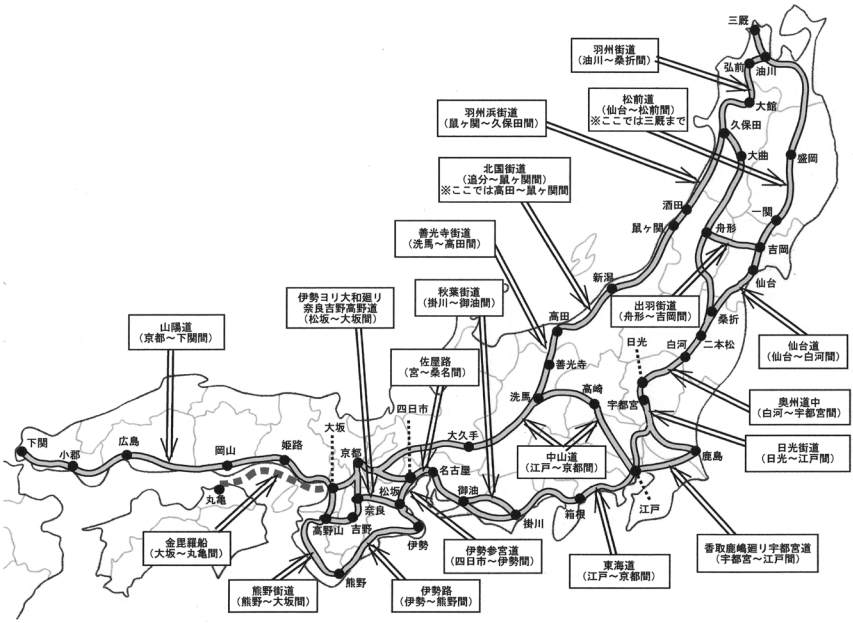

図４　東北地方の庶民が伊勢参宮の旅において歩いた街道

別に整理したものである。上記の方法をもって計算したところ、近世後期の東北地方の庶民男女による１日平均の歩行距離は約34. 1km であった。冒頭で述べたように、これまで近世の旅人の歩行距離は１日に10里（約39km）程度と把握されてきたが、本研究の条件設定に限れば、平均的な歩行距離は通説よりも若干短かったと指摘されよう[19]。

次に、平均歩行距離の男女差であるが、庶民男性の旅日記から導き出した歩行距離が約34. 9km であるのに対して、庶民女性の方は約28. 6km であり、そこには明確な差異を認めざるを得ない。これが歩行能力の違いを示すものであるかは即断できないにしろ、長期間に及ぶ旅の道中において、女性の方が日々の歩行距離を抑制する傾向にあったといってよい。

表2　東北地方の庶民男性による伊勢参宮の旅の歩行距離

No.	表題	年代	旅の期間	ルートの類型	日数（日）				歩行距離（km）				歩行距離別の日数（日）							
					総日数	計測日数	距離不明	逗留	総距離	平均	最長	最短	～10km	10km台	20km台	30km台	40km台	50km台	60km台	70km台
1	伊勢参宮道中記	1768	12.17～　2.23	近	60	55	1	4	1892.4	34.4	54.1	11.6	0	5	12	22	11	5	0	0
2	西国道中道法並名所泊宿附	1773	5.25～　8.20	四＋富	84	73	9	2	2691.1	36.9	69.0	11.7	0	10	11	21	19	10	2	0
3	参宮道中記	1777	11.28～　3.3	近	95	86	1	8	2829.0	32.9	46.4	7.4	2	6	20	39	19	0	0	0
4	西国道中記	1783	2.6 ～　6.27	四	142	100	37	5	3018.7	30.2	58.6	7.8	4	17	26	31	17	5	0	0
5	伊勢参宮道中記	1786	2.4 ～　6.17	四	124	73	8	43	2173.2	29.8	63.1	3.9	4	10	20	26	10	2	1	0
6	伊勢参宮所々名所並道法道中記	1794	1.16～　4.16	四	90	73	7	10	2439.2	33.4	56.7	5.8	3	7	15	28	17	3	0	0
7	道中記	1799	6.27～　9.21	四	77	67	3	7	2285.8	34.1	53.1	7.6	1	6	13	26	18	3	0	0
8	遠州秋葉・伊勢参宮道中記	1805	11.11～　1.11	四	60	54	2	4	1898.5	35.2	58.1	7.8	2	6	4	24	13	5	0	0
9	御伊勢参宮道中記	1805	1.10～　3.18	四	67	52	2	13	1837.4	35.3	60.6	11.7	0	9	8	18	10	6	1	0
10	伊勢道中記	1806	6.13～　7.27	近＋富	44	40	0	4	1307.6	32.7	52.6	11.7	0	3	11	21	3	2	0	0
11	伊勢参宮道中記	1811	閏2.20～　5.15	近	84	66	4	14	2105.8	31.9	51.5	7.8	2	4	21	23	13	3	0	0
12	道中記	1814		四	86	80	2	4	2773.9	34.7	59.7	6.3	1	7	19	26	19	8	0	0
14	伊勢参宮西国道中記	1818	10.21～　1.25	四	93	84	7	2	3014.3	35.9	67.9	9.7	1	5	13	37	23	4	1	0
15	伊勢参宮道中記	1818	12.2 ～　2.2	近	62	54	1	7	2074.0	38.4	56.9	11.7	0	2	5	20	21	6	0	0
16	伊勢参宮旅日記	1823	1.6 ～　4.3	四	86	68	7	11	2939.6	43.2	74.5	19.3	0	6	9	19	27	6	0	1
17	伊勢道中記	1826	1.14～　4.15	四	92	79	5	8	2944.3	37.3	58.5	5.3	3	3	13	20	27	13	0	0
18	伊勢参宮花能笠日記／伊勢拝宮還録	1828	1.18～　5.14	その他	115	70	35	10	2582.3	36.9	58.0	7.8	1	6	13	17	24	9	0	0
19	（表題不明）	1830	1.9 ～閏3.8	四	86	78	1	7	2583.2	33.1	61.8	6.0	4	7	16	30	20	0	1	0
20	道中記	1830	3.15～　7.15	四＋富	110	57	33	20	2127.1	37.3	61.2	11.6	0	6	6	22	17	3	3	0
21	（表題不明）	1831		四	66	56	2	8	1996.6	35.7	65.5	11.7	0	7	11	20	14	2	2	0
22	万字覚帳	1835	2.5 ～　5.2	四	75	65	6	4	2139.9	32.9	53.6	7.8	3	4	11	32	13	2	0	0
23	道中日記	1836	1.26～　4.29	四	90	75	1	14	2737.4	36.0	71.9	11.2	0	7	10	28	22	5	2	1
24	伊勢参宮道中日記帳	1841	1.5 ～　3.10	四	96	74	5	17	2424.1	32.8	58.9	7.8	2	9	18	24	15	6	0	0
25	西国道中記	1841	12.11～　2.8	四	85	73	3	9	2717.1	37.2	67.5	9.7	1	3	10	33	19	6	1	0
26	伊勢参道中の日記	1844	2.11～　6.3	その他	106	57	11	38	1854.0	32.5	66.1	3.9	3	10	11	12	17	3	1	0
27	道中記	1849	1.26～　4.29	四	79	74	3	2	2594.4	35.1	56.7	7.8	2	5	11	35	18	3	0	0
28	（表題不明）	1849	6.27～　10.3	四＋富	95	74	6	14	2740.0	36.2	75.0	4.9	1	8	15	25	15	7	1	1
29	（表題不明）	1849	10.15～　1.9	四	83	69	6	8	2413.7	35.0	63.1	15.5	0	2	18	27	17	4	1	0
30	伊勢参宮道中記	1850	1.9 ～　3.17	近	63	59	0	4	1890.5	32.0	52.3	10.5	0	12	11	27	8	1	0	0
32	伊勢道中記	1853	5.24～　8.9	四＋富	75	64	5	6	2423.2	37.9	56.5	11.7	0	5	12	16	24	7	0	0
34	道中日記帳	1856	2.1 ～　4.17	四	73	49	12	12	1661.4	33.9	54.8	2.1	3	6	7	15	13	5	0	0
35	道中記	1857	1.25～　5.15	四	109	90	11	8	3174.8	35.3	74.3	6.1	1	8	20	30	25	3	2	1
36	伊勢参宮并熊野三社廻り金毘羅参詣 道中道法附	1859	2.9 ～　5.29	四	104	82	13	9	2861.2	34.9	70.8	9.2	1	6	21	33	13	6	1	1
39	道中帳	1866	1.7 ～　4.16	近	96	92	1	3	3169.7	34.4	54.2	7.8	3	9	16	33	29	2	0	0

※「ルートの類型」の記号：近→近畿周回型／四→四国延長型／富→富士登山セット型

表３　東北地方の庶民女性による伊勢参宮の旅の歩行距離

No.	表題	年代	期間	ルートの類型	日数（日）				歩行距離（km）				歩行距離別の日数（日）							
					総日数	計測日数	逗留	距離不明	総距離	平均	最長	最短	～10km台	10km台	20km台	30km台	40km台	50km台	60km台	70km台
13	道中日記	1817	3. 23～ 7. 11	近	108	54	42	12	1584. 5	29. 3	56. 5	7. 8	3	10	14	18	8	1	0	0
31	道中記	1853	3. 26～ 6. 30	近	94	60	16	18	1803. 6	30. 0	53. 5	7. 8	1	14	12	27	4	2	0	0
33	西遊草	1855	3. 19～ 9. 10	四	172	61	79	32	1812. 3	29. 7	55. 9	6. 0	5	11	16	16	10	3	0	0
37	道中日記	1860	7. 6 ～ 9. 27	近＋富	65	57	4	4	1633. 5	28. 7	59. 7	7. 8	2	12	15	21	4	3	0	0
38	参宮道中諸用記	1862	8. 22～12. 24	四	147	116	27	4	2942. 6	25. 4	53. 5	7. 1	2	31	56	22	2	3	0	0

※「ルートの類型」の記号：近→近畿周回型／四→四国延長型／富→富士登山セット型

②距離別にみた歩行距離の割合

表２・表３の「歩行距離別の日数」の欄は、日毎の歩行距離を10km 単位で区切り、各々の距離の範囲に該当する日数を記載したものである。39編の旅日記を総合して、距離別にみた歩行距離の割合を整理すると、表４のようになる。

全体としてみれば、庶民の１日あたりの歩行距離の割合は、平均値に近い20～40km 台に集中しているものの、少ない日には１桁～10km 台の場合もある一方で、多い日には60～70km 台に達していたことがわかる。男性の日ごとの歩行距離が20～40km 台に分布している一方、女性の歩行距離は平均値を反映するかのように10～30km 台に集中している。また、女性が60km 以上の距離を歩いていないところにも、相対的な特徴を確認することができよう。

③歩行距離の上限

近世後期における東北地方の庶民にとって、１日あたりの歩行距離の上限はどの辺りにあったのであろうか。

本研究が対象とした旅日記のうち、１日に最も長い距離を歩いた庶民男性は、嘉永２（1849）年に丸森村（現・宮城県丸森町）から旅をした森右衛門である（史料28）。この旅は、先の類型のうち「四国延長型」と「富士登山セット型」を併せたルートを通行しているが、大坂～二子村間で75. 0km もの距離を歩いた形跡が確かめられる[20]。

表４　距離別にみた歩行距離の割合　（単位：％）

	～10km	10km台	20km台	30km台	40km台	50km台	60km台	70km台
男性	2.0	9.6	19.4	36.4	25.0	6.6	0.8	0.2
女性	3.7	22.4	32.4	30.0	8.0	3.4	0	0
全体（男女）	2.3	11.2	21.0	35.6	22.8	6.2	0.7	0.2

１日に70km程度を歩き通すことは、当時としては不可能な数値ではなかったのである。本研究が取り上げた旅日記のうち、最長歩行距離が70kmに達しているものは５編（史料16、23、28、35、36）確認することができる。

一方、庶民女性で１日の歩行距離の最高値を示しているのは、万延元（1860）年の『道中日記』（史料37）の旅であった。岡の谷～下諏訪間の約59.7kmを１日のうちに歩いているのである。

ところで、漆原村（現・福島県西会津町）の須藤万次郎は、元治２（1865）年に伊勢参宮の旅を行った際に『伊勢詣同行定』という同行者間の取り決めを書き残している。そこには、項目のひとつとして、日々の道中の歩行距離は10里（約39km）を目安とし、それが12里（約46.8km）ないしは13里（約50.7km）にまで及びそうな場合は、同行者間での相談が必須である旨の戒めが記されている[21]。

先に示した歩行距離の距離別の割合をみると、１日に60～70km台を歩いているものを足しても、全体のわずか１％に過ぎず、女性に至っては60kmを超える距離を歩いた形跡そのものがみられない。ゆえに、東北地方の庶民男女にとって、１日に60km以上もの距離を歩くことは、長期間におよぶ道中において極めて稀なケースであったといわねばならない。このことから推察するに、彼らにとっての無理のない歩行距離の上限とは、上述の取り決めが示すように50km程度のところに求めることができよう。

④日数の経過と歩行距離との関係

道中における日数の経過が歩行距離に及ぼした影響を知る目的で、各々の旅

表５　東北地方の庶民男性における

No.	表題	年代	歩行距離（km）				総日数（日）	10日		
			総距離	平均	最長	最短		～10日	～20日	～30日
1	伊勢参宮道中記	1768	1892.4	34.4	54.1	11.6	60	29.7	32.5	33.3
2	西国道中道法並名所泊宿附	1773	2691.1	36.9	69	11.7	84	44.7	42.1	29.9
3	参宮道中記	1777	2829	32.9	46.4	7.4	95	30.8	33.0	33.1
4	西国道中記	1783	3018.7	30.2	58.6	7.8	142	24.6	24.7	37.5
5	伊勢参宮道中記	1786	2173.2	29.8	63.1	3.9	124	35.7		20.4
6	伊勢参宮所々名所並道法道中記	1794	2439.2	33.4	56.7	5.8	90	31.1	25.2	29.5
7	道中記	1799	2285.8	34.1	53.1	7.6	77	35.8	30.0	34.8
8	遠州秋葉・伊勢参宮道中	1805	1898.5	35.2	58.1	7.8	60	37.8	34.9	39.6
9	御伊勢参宮道中記	1805	1837.4	35.3	60.6	11.7	67	22.8	33.1	36.8
10	伊勢道中記	1806	1307.6	32.7	52.6	11.7	44	33.0	20.9	34.9
11	伊勢参宮道中記	1811	2105.8	31.9	51.5	7.8	84	27.1	37.9	32.5
12	道中記	1814	2773.9	34.7	59.7	6.3	86	29.4	37.1	36.0
14	伊勢参宮西国道中記	1818	3014.3	35.9	67.9	9.7	93	34.0	35.6	36.2
15	伊勢参宮道中記	1818	2074	38.4	56.9	11.7	62	34.3	38.6	36.6
16	伊勢参宮旅日記	1823	2939.6	43.2	74.5	19.3	86	31.4	31.6	37.2
17	伊勢道中記	1826	2944.3	37.3	58.5	5.3	92	27.1	37.1	33.7
18	伊勢参宮花能笠日記 伊勢拝宮還録	1828	2582.3	36.9	58	7.8	115	27.3	33.5	
19	（表題不明）	1830	2583.2	33.1	61.8	6	86	20.9	30.6	38.0
20	道中記	1830	2127.1	37.3	61.2	11.6	110	32.2	41.1	33.6
21	（表題不明）	1831	1996.6	35.7	65.5	11.7	66	32.7	33.8	34.9
22	万字覚帳	1835	2139.9	32.9	53.6	7.8	75	23.7	25.6	32.8
23	道中日記	1836	2737.4	36	71.9	11.2	90	28.9	35.3	36.9
24	伊勢参宮道中日記帳	1841	2424.1	32.8	58.9	7.8	96	30.2	31.9	35.5
25	西国道中記	1841	2717.1	37.2	67.5	9.7	85	35.6	38.9	37.6
26	伊勢参道中の日記	1844	1854	32.5	66.1	3.9	106	29.9	22.6	59.2
27	道中記	1849	2594.4	35.1	56.7	7.8	79	28.9	36.6	31.8
28	（表題不明）	1849	2740	36.2	75	4.9	95	31.1	36.2	39.1
29	（表題不明）	1849	2413.7	35	63.1	15.5	83	38.2	31.1	31.9
30	伊勢参宮道中記	1850	1890.5	32	52.3	10.5	63	27.4	32.6	36.3
32	伊勢道中記	1853	2423.2	37.9	56.5	11.7	75	33.3	39.4	43.6
34	道中日記帳	1856	1661.4	33.9	54.8	2.1	73	25.7	27.7	32.3
35	道中記	1857	3174.8	35.3	74.3	6.1	109	31.5	30.0	28.4
36	伊勢参宮并熊野三社廻り 金毘羅参詣 道中道法附	1859	2861.2	34.9	70.8	9.2	104	38.1	35.2	34.4
39	道中帳	1866	3169.7	34.4	54.2	7.8	96	26.6	38.9	30.1

※「10日毎の平均歩行距離」の欄では、該当する日数の範囲において逗留などを理由に歩行移動の形

日数の経過と歩行距離との関係

毎の平均歩行距離（km）											
～40日	～50日	～60日	～70日	～80日	～90日	～100日	～110日	～120日	～130日	～140日	～150日
31.3	40.4	38.8									
31.6	32.4	36.3	42.0	45.2							
28.5	24.0	35.8	35.8	35.9	37.3	36.5					
31.6	30.8	35.6	30.3	33.7	25.0	11.1	20.9	23.6	37.3	33.4	38.0
31.6	30.4	28.6	15.5	24.0	19.9	27.3	34.3	32.5	31.1		
35.7	38.3	35.0	35.4	37.1	33.9						
29.0	42.8	37.9	29.9	39.3							
27.7	37.7	32.9									
33.1	42.0	35.9	42.4								
29.4	36.0										
26.4	27.1	31.2	34.4	33.9	37.8						
33.3	30.9	37.6									
32.1	35.4	37.5	35.3	31.9	43.6	41.2					
36.5	38.9	46.0	35.1								
35.6	38.1	34.8	42.2	49.3	40.0						
39.3	34.6	39.1	42.1	42.9	44.6						
29.7	35.2	45.1	36.8	37.5	41.0	47.0	39.3	41.9			
28.8	34.5	32.8	39.9	40.9							
33.9	42.3		37.7	44.9	43.8	22.2	44.5				
30.2	35.8	41.7	39.8								
34.4	37.6	34.7	37.5	40.9							
40.6	38.8	27.8	36.8	43.8	40.6						
30.0	26.7	33.6	43.4	32.6	38.5	18.3					
35.9	33.2	36.8	39.7	37.6	38.0						
26.2	28.7	23.2		11.7	40.8	40.5	39.9				
36.2	31.4	35.1	41.3	37.3							
26.9	48.1	48.8	32.3	41.8	34.2	25.4					
33.4	29.6	42.9	39.6	37.6	32.5						
26.3	33.0	34.4	19.5								
30.9	39.5	40.6	39.0	30.4							
28.6	34.4	44.0	44.0	27.5							
40.1	36.6	27.5	35.5	40.2	38.9	39.4	39.5				
34.0	26.9	34.1	34.2	41.0	36.5	35.6					
34.9	30.5	34.4	37.4	35.4	38.7	35.2					

跡が確認できない場合は斜線を付した。

表６　東北地方の庶民女性における

No.	表題	年代	歩行距離（km）				総日数	10日毎の					
			総距離	平均	最長	最短		～10日	～20日	～30日	～40日	～50日	～60日
13	道中日記	1817	1584. 5	29. 3	56. 5	7. 8	108	33. 6	31. 9	24. 9	35. 2	30. 0	18. 6
31	道中記	1853	1803. 6	30. 0	53. 5	7. 8	94	27. 5	23. 4	43. 5	26. 0	31. 3	21. 8
33	西遊草	1855	1812. 3	29. 7	55. 9	6. 0	172	18. 9	11. 7	30. 2	27. 5	38. 0	31. 4
37	道中日記	1860	1633. 5	28. 7	59. 7	7. 8	65	29. 1	19. 1	27. 6	23. 4	37. 8	32. 0
38	参宮道中諸用記	1862	2942. 6	25. 4	53. 5	7. 1	147	19. 2	27. 6	27. 1	23. 2	23. 9	21. 4

※「10日毎の平均歩行距離」の欄では、該当する日数の範囲において逗留などを理由に歩行移動の形跡が確認

日記の行程を10日単位で区切り、10日毎の平均歩行距離の推移を検討した（表５・６参照）。日数を重ねるごとに旅人の疲労が蓄積されていくと仮定すれば、旅の序盤と終盤とでは歩行可能な距離にも自ずと差異が生じた可能性が想定されるためである。

しかし、いずれの旅日記においても、男女ともに日数の経過に連れて歩行距離が大きく変動している様子は見られない。近世後期における東北地方の庶民男女は、在地を出立してから帰着するまでの間、概ね一定のペースを保って歩き続けたのである。特に女性の方は、１日の歩行距離を無理のない数値（平均28. 6km）で終始安定させることで、数ヶ月間におよぶ道中を無事に歩き通すべく企図する傾向にあったのではないだろうか。

４．結び

本研究は、近世後期における東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅に着目して、彼らが在地出立から帰着までに歩いたルートと実際の歩行距離の傾向を明らかにし、その男女差を中心に検討したものである。検討の結果は、以下の通りである。

１．庶民が歩いた伊勢参宮ルートは、「近畿周回型」「四国延長型」「富士登山セット型」の３つに類型化された。男女ともに、このいずれかのルートを選んで旅をする傾向にあった。

２．庶民の１日平均の歩行距離は、全体（男女）でみれば約34. 1km であっ

日数の経過と歩行距離との関係

平均歩行距離（km）											
～70日	～80日	～90日	～100日	～110日	～120日	～130日	～140日	～150日	～160日	～170日	～180日
14. 8		30. 4	30. 0	15. 8							
32. 7	32. 1	33. 7	41. 2								
19. 5			25. 1		36. 0	39. 5			27. 3	28. 9	15. 6
29. 9											
28. 1	22. 1	23. 3	26. 2	24. 2	17. 8	28. 5	30. 5	31. 4			

できない場合は斜線を付した。

た。これを男女で区別すると、男性が約34. 9km、女性が約28. 6km となり、そこには明確な男女差が確認された。

3．庶民男性の１日あたりの歩行距離の割合は、少ない日には１桁～10km 台、多い日には60～70km 台に達することもあったが、概ね20～40km 台に集中していた。一方、庶民女性の日毎の歩行距離は大半が10～30km 台に分布していて、60km 以上の距離を歩いた形跡はみられなかった。この点からも、１日の歩行距離は男性の方が女性よりも相対的に長かったといえよう。

4．１日あたりの最長歩行距離は男性が約75. 0km、女性が約59. 7km であった。しかし、男性にしても１日に60km 以上もの距離を歩くことは極めて稀なケースで、庶民男女にとっての無理のない１日の歩行距離の上限とは、50km 程度のところに求められた。

5．日数の経過と歩行距離との関係性を検討したところ、男女ともに時系列で歩行距離が明確に変動した傾向は見られなかった。東北地方の庶民男女は、在地を出立してから帰着するまでの間、概ね一定のペースを保って歩き続けたのである。

［付記］
本研究は科学研究費助成事業・基盤研究（C）の助成を受けて行われた。
課題番号：25350784
課題名：近世後期における東北地方の庶民男女による旅の歩行距離に関する研究

研究代表者：谷釜尋徳

〈注記及び引用・参考文献〉

（1） 富永祐治『交通における資本主義の發展』岩波書店、1953年、21頁。

（2） 日本史研究における「近世」とは、一般的に天正18（1590）年に豊臣秀吉が全国を統一した時点から、慶応3（1867）年の大政奉還までを指す（高木昭作・守屋毅「江戸時代」『日本史事典』平凡社、2001年、76～88頁）。この期間において、本研究が対象とする「近世後期」とは通常、政治的な変動を意識して18世紀後半頃からはじまると考えられている（池上彰彦「後期江戸下層町人の生活」『江戸町人の研究 第二巻』吉川弘文館、1974年、142頁）。本研究における「近世」も一般史の時代区分（1590～1867）に倣うものであるが、取り扱う39編の旅日記の年代幅を考慮すると、実際の研究対象期間は明和5（1768）年から慶應2（1866）年までとなる。

（3）「庶民」という文言は、『社会科学事典』において「貴族などにたいして普通の人々」「支配階層にたいしては支配される被支配者層」「大部分は生産者」などと定義づけられている（桜井庄太郎「庶民」『社会科学事典』鹿島研究所出版会、1971年、365頁）。本研究における「東北地方の庶民」とは、現在の東北地方に該当する地域に居住し、貴族・武士層を除く階層のもの全てを包括する広い概念として捉えるものである。

（4） 吉田健一「日本人の体力」『國學院大學体育学研究室紀要』2号、1970年、11～21頁。増永正幸「日本人の生活様式に関する科学的一考察」『國學院大學体育学研究室紀要』18号、1986年、19～28頁。今井金吾『江戸の旅』河出書房新社、1988年、140頁。今井金吾『江戸の旅風俗』大空社、1997年、38～39頁。齊藤俊彦『轍の文化史』ダイヤモンド社、1992年、61～78頁。齊藤俊彦『くるまたちの社会史』中央公論社、1997年、30～39頁。金森敦子『江戸庶民の旅』平凡社、2002年、24頁。金森敦子『伊勢詣と江戸の旅』文藝春秋、2004年、9頁。金森敦子『“きよのさん”と歩く江戸六百里』バジリコ、2006年、5頁。菅井靖雄『こんなに面白い江戸の旅』東京美術、2001年、9頁。菅野俊輔『図解江戸の旅は道中を知るとこんなに面白い』青春出版社、2009年、8頁。石川英輔「数字で読む江戸時代の東海道」『歩きたくなる大名と庶民の街道物語』新人物往来社、2009年、154～162頁。

（５）　ここでいう旅日記とは、旅程順に日付、天候、宿泊地、旅籠名、旅籠代、昼食代、間食代、訪問地とその若干のコメント、賽銭、渡船代、その他購入した品々の代金などが列記されたものであり、いわば金銭出納帳ないしは日誌的な性格の史料である（田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣」『交通史研究』49号、2002年３月、19～20頁）。全ての旅日記にこれらの項目が漏れなく記されているわけではないが、そのいずれかについて記録されているといってよい。

（６）　谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』20号、2007年３月、１～22頁。

（７）　谷釜尋徳「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』８号、2011年３月、33～54頁。

（８）　ここでいう「東北地方」とは、現在の広域行政区分において青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県の６県に該当する地域を想定している。これは、古代～近世において事実上用いられていた「令制国」の区分に照らすと、陸奥国（青森県・岩手県・宮城県・福島県・秋田県）と出羽国（山形県・秋田県）に概ね該当する地域となる。一言に「東北地方」といっても、その面積は広域におよび、日本海側と太平洋側では気候風土にも相違点が認められる。しかしながら、近世の旅に関しては、旅のルート、期間、歩行距離など様々な点において共通点が見出せることを理由に、本研究では「東北地方」をひとつのまとまりを持った地域として捉え、これを研究対象とした。

（９）　谷釜尋徳「近世における東北地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離」『スポーツ健康科学紀要』12号、2015年３月、23～48頁。

（10）　近世における女性の旅の歩行距離を取り上げた研究もある。この研究では、近世後期の庶民女性の紀行文と旅日記に基づいて、彼女らの１日あたりの歩行距離が約30.4kmであったと結論づけられた（谷釜尋徳「近世後期における庶民女性による旅の歩行距離について」『体育史研究』27号、2010年３月、33～45頁）。しかし、そこでは出身地域や身分を問わず対象が選び出され、さらに旅の全行程ではなく、ルートの一部分を切り取って分析されていたため、東北地方の庶民女性による旅の歩行の様相は未だに手つかずのテーマである。

（11）　蒐集した旅日記について、旅日記の著者が男性であっても、その旅の構成メンバーに

女性が含まれていれば、当該史料は女性の歩行距離を反映するものと判断した。同行者に男女が混在している場合、男性が女性の体力面に配慮して歩行のペースを落とすことはあっても、逆に女性の側が男性に進度を合わせて数ヵ月間歩き続けることは至難の業であると推測されたためである。

(12) 本研究においてルートを地図上に復元するにあたっては、近世の旅を現代の視点からイメージしやすくすべく、地図上の境界線は現行の広域行政区画とした。なお、ルートの詳細な復元にあたっては、弘化3（1846）年刊行の『改正増補大日本國順路明細記大成』を主な拠り所とした（山崎久作『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛、1846年）。当該史料は、日本全国の街道筋が地図上に多色刷りで網羅されており、各街道における宿場間の距離の情報を漏れなく知ることができるからである。

(13) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷」『筑波大学人文地理学研究』14号、1990年3月、231～255頁。

(14) このことについては、以下の研究に詳しい。

岩科小一郎『富士講の歴史』名著出版、1983年。青柳周一『富獄旅百景』角川書店、2002年。

(15) この傾向は、近世後期の旅行案内書『旅行用心集』の中に「東国の人ハ伊勢より大和、京、大坂、四国、九州迄も名所、旧跡、神社、仏閣を見回り、西国の人は伊勢より江戸、鹿島、香取、日光、奥州松島、象潟、信州善光寺迄拝ミ回らんことを願ふなり。」（八隅蘆庵『旅行用心集』須原屋茂兵衛伊八、1810年、1丁）という一節があることから推して、東北地方のみならず当時行われた旅全般に広く見られたといえよう。また、近世後期の随筆作家である喜多村信節の『嬉遊笑覧』に、当時の旅の傾向として「神佛に参るハ傍らにて遊樂をむねとす。伊勢は順路なれば、かならず参宮す。」（喜多村信節「嬉遊笑覧」（1830）『嬉遊笑覧』近藤出版部、1887年、199頁）と記されていることと併せて考えると、彼らにとって信仰は口実であって、旅の真の目的は道中の異文化に触れて楽しむことに求められていたといわねばならない。

(16) ルートの詳細な復元にあたっては、『改正増補大日本國順路明細記大成』（山崎久作『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛、1846年）を主な拠り所とした。こうした街道筋の整備や宿場の設置は、庶民の長距離歩行の旅を可能にした大きな要因と

して数えることができる。

(17)　宿場間の距離を明らかにするにあたっては、『改正増補大日本國順路明細記大成』（山崎久作『改正増補大日本國順路明細記大成』和泉屋市兵衛、1846年）の記述内容を拠り所とした。

(18)　ただし、この方法によって明らかにされた歩行距離は、主要な街道を外れることなく歩いた場合の数値であって、途中脇道にそれて名所旧跡等に立ち寄った分の距離は反映されていない。なお、現在の距離単位への換算は、１里＝36町＝約3.9km、１町＝60間＝約109mで計算している。

(19)　平均値は必ずしも当時の実情を反映するものではないが、１日平均の歩行距離が10里（約39km）に達している旅日記は、39編中わずか１編（史料16）のみであった。

(20)　森右衛門「（表題不明）」（1849）『伊勢参宮仕候御事』古文書で柴田町史を読む会、2000年、２～296頁。

(21)　当該の記述は、次の通りである。

「道中之義は十里を限り可致候事。若し十二・十三里にも及候はば仲間能々談事之上にて可致候事。」（須藤万次郎「伊勢詣同行定」（1865）『会津高郷村史』福島県耶麻郡高郷村、1981年、336頁）

―たにがま　ひろのり・法学部准教授―